

日常を覆す一人の普通

ズレパニ・ロツサ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

夢で悪いものを見させる。それは夢魔。

その夢魔を倒す者が一人いた。その者の名前は、如月 双太。

双太はネットオークションを趣味としている。

パツと思いついたので書きました。こちらの小説は自分の小説のキャラたちも出てきます。

目次

第1話	始まりのプロローグ	1
第2話	消えない過去	7
第3話	招待状	14
第4話	オークション開始!!	19
第5話	行きは良い良い帰りは怖いオ クション	24
第6話	未来を変えにきた予言者	30
第7話	俺らの文化祭	36
第8話	俺らの文化祭	44
第9話	悲報が起きたらブツ飛ばせ!	52

第1話 始まりのプロローグ

ブオオオオオー…

電車が通る。

店員「いらっしやいませー♪」

店員が客に向けて言う。

こんなのは日常茶飯事。

それじゃあ………

『日常茶飯事じゃない事って何?』



霧慧「こんな感じ?」

双太「いやいや。もっとこうじゃない?」

きさらぎ そうた

俺の名前は如月 双太。彼女の名前は

かさみ きりえ

傘見 霧慧。俺と同じ高校1年だ。

コイツとは幼稚園から同じで全くクラスが離れないまま高校まで来た。

霧慧「こつちは？」

双太「うん。いいんじゃないかな。」

霧慧「やったあ！」

俺たちは今、高校の文化祭の準備に真つ最中。

委員長「はい！皆さん。ありがとうございました。今回はここまで。もうすぐ校門が閉まるので速やかに帰りましょう！」

霧慧「ええく…いい感じだったのにく…」

残念そうに言う霧慧。

双太「まあまあ…また明日頑張ろうよ。」

霧慧「うん。じゃあ…帰ろうか。」

双太「そうだな。」

そして俺たちは家に帰った。

◆ 双・霧 「ただいまー！」

俺たちは同じ家に同居している。理由は霧慧に親がいないのと、もう一つ理由がある。その理由が：『性行為目的の誘拐』だ。

俺たちが中二のとき霧慧は高校生に誘拐された。

まあ、その時は俺が出したから良かったけど。霧慧には親がいないから自分の家に居候させて上げている。だから高校で付き合ってるのか？とよく聞かれる。勿論「まだ」付き合ってる。

母 「霧慧ちゃん、先お風呂入って来な♪」

霧慧 「はーい♪」

双太 「何で先俺じゃねーんだよ！」

母 「フフツ♪」

双太 「たくよー……」

今は夜9時。良い子のお子さんはそろそろ寝る頃だろう。だが…この夜が俺の楽しみさ…♪

…

双太「母さん、いつものしてくるわ。」

母「ほどほどにしときなさいよー！」

双太「ハイハイ♪」

俺は自分の部屋（二階）に行つて、PCを開いた。

俺の趣味はオークションで物を取ることだ。

双太「今回は…おつ、『携帯型ナイフ』か…」

霧慧「何これ…携帯型ナイフ？」

双太「うわあ！いつ上がつたんだよ!？」

いつの間にか霧慧は風呂から上がつて二階の俺の部屋に入つて自分の後ろにいた。

霧慧「え？ついさっき♪」

双太「まだ10分しか入ってないぞ!？」

霧慧「それが当たり前だよ？」

双太「いつも15分は入っているだろ？」

霧慧「そうかなー♪…って始まつてるよ！」

双太「嘘だろ!？」

もう、オークションが始まっていた。

双太「もう10万? 安い!! 100万!!」

するとこの商品は俺に買い取られた。

双太「やりいー! ちよろいぜ!」

霧慧「あるんだよね? 100万円。」

双太「当たり前だ。今の財布の中は「1000億」だけ? ただ取られたくないから財布の中には5000しか入れてないがな。」

霧慧「そうだね。あのとき貰ったもんね♪」

あのときとは、霧慧が誘拐されたときの事だ。

双太「ああ、そうだ。さて…こんなことしてたらもう10時だ。風呂入って来るよ。」

霧慧「行ってらっしゃい。」

双太「そうそう、俺のPCに触るなよ。触ったら何が起こるか分からん。そうだ。もう用は済んだし、電源消しとくわ。」

俺は電源を消した。そして一階の風呂に入った。

双太「あー…あつたけー…」

霧慧「入っていい？」

双太「……………外にお湯を入れてそんな中入れ。露天風呂みたいだぞ。」

霧慧「やだ。外だとまた来そうだもん！ねえ……………私を守って……………」

双太「はあ……………もう付き合うか？」

霧慧「えっ……………」

双太「それがOKなら入れ。」

急に何言ってるんだ。俺は。

霧慧「わかった……………付き合おうよ。だから……………入っていい？」

双太「良いぞ、入れ。ただし、まだ付き合っているだけ。大人の遊びはまだ禁止だ。い

いな？」

霧慧「うん……………」

そして俺は霧慧と一緒に風呂に入って二階に戻った。

ただ……………これを見ていた母は……………」

母「青春ねー♪」

このあと俺たちは一緒にベッドに入って寝て、母の気分はとても上がっていた。

第2話 消えない過去

母「早く行かないと遅刻するわよー！」

双太「わーってるって！」

霧慧「早く行こうよ！双太。」

双太「待ってて！てか、俺の部屋入って来るなよ！」

霧慧「別に良いじゃない？だって付き合っているんだし。」

双太「っー……はあ……行くぞ。」

霧慧「うん！お母さん行ってくるね！」

母「行つてらっしやい♪霧慧ちゃん！」

双太「じゃあ、行つてくるわ！」

母「行つてらっしやーい！」

双太「とりあえず急ごうぜ。」

あと30分で門が閉まってしまうのだ。

霧慧「うん……！急ごう！」

急ぐため俺たちは走り出した。

バンツ…!!

不良「ああ? テメエ誰に当たったと思ってるんだ??」

急いでたせいで霧慧が不良に当たった。

霧慧「う…う…」

ヤバイ…! これは…霧慧にとってはトラウマだ。

双太「すみません。彼女が当たってしまい…」

とりあえず謝る。

霧慧「双太…」

不良「へえ…双太クンって言うのか…なあ、双太クン…♪テメエの彼女のおかげで怪

我したんだが!? ああん!? この治療費誰が出してくれるんかなあ!?!」

金…の問題…か…

双太「ちなみに治療費って何円ですか…?」

不良「ああ? 100万だろ?」

双太「はい、どうぞ。」

不良「は、はあ…?」

100万? 低い値で良かった。

不良「た…確かに本物だ…」

双太「それじゃあ、僕ら急いでるんで。」



先生「如月、傘見。セーフだ。」

双太「うーっわ…ギリギリだ。」

先生「今回は見逃してやるが、次はないぞ？」

霧慧「と言いつついつも許してくれるじゃないですか♪」

先生「まあな♪お前らだけは特別だからな♪」

いんどう なお

この先生の名前は陰道 治。口調は男性みたいだがちやんとした女性だ。

俺たちと中学まで同級生で治は中学を卒業してからこの高校の先生として就職し始めた。しかも、俺と霧慧の担任だ。

治「おい！あと五分で授業始まるぞ！双ちゃん！」

双太「おけ！霧…慧？治…霧慧は？」

治「もうとつくに教室の方に向かった。」

双太「それを早く言えー!!!」

俺は全速力で教室に向かった。

治「気をつけるよ。…って言うか私も急がないとな。」



双太「遅れましたー!」

治「遅いぞー、如月。」

双太「はやっ!?陰道先生!」

治「これでも先生、運動力良いんだぞ?」

双太「廊下走りました?」

治「さあ、授業の続きするぞー。如月椅子に座れー。」

双太「走ったよね!?今のスルーは絶対廊下走ったよね!」

◆
　　〽昼休み〽

双太「やべっ！弁当忘れた!!」

霧慧「私のいる？」

双太「いやいいよ。最近、昼飯いらなと思ってるし。まあ…俺はただの小食だからな。」

本当の話だ。

霧慧「わかったよ。そうだ、治ちゃんが双太を呼んでたよ。」

双太「マジ？わかった。」

双太「失礼しまーす。」

治「如月！こっちこっち。」

双太「どうしたんですか？」

治「実はな…朝不良と会ったろ？」

双太「うん、会ったね。とか何か何で知ってるんですか？」

治「それが、その不良がここの3年らしいんだ。」

双太「嘘だろ…。」

治「そいつが双太から大金貰ったって言ってるんだよ。」

双太「大金…。」

治「お前が持つてるはずが無いんだ。」

双太「いや、それ俺っす。」

治「…えっ…？それ本当？双ちゃん。」

双太「あの事件で貰ったんですよ。」

治「もしかして…あの事件って…。」

双太「『中二少女誘拐事件』です。」

治「……………わかった。霧慧と昼飯中だったろ？すまん。戻って良いぞ。」

双太「わかりました。」

あの事件…嫌な事件だった…だってそ

.....

の事件のせいで霧慧が霧慧じゃなくな

・
・
・
・

ってしまったのだから…。

双太「ごめんなー。霧慧。遅くなって。」

霧慧「いやいや、そんな遅くなってないよ♪」

双太「そうか？」

そしてこのあと文化祭の手伝いして家に帰った。

第3話 招待状

ピンポーン

「郵便でーす！」

母「双太ー出てー。」

双太「おけー。」

「如月 双太さんって貴方ですか？」

双太「はい。そうですけど。」

「貴方宛に荷物がありまして。サインとハンコをして貰ってもいいですか？」

双太「ああ、わかりました。」

俺は段ボールの箱にサインとハンコをした。

「ありがとうございます。」

霧慧「何が入ってるの？♪」

双太「開けるぞ。」

すると中にはカリフォルニア行きの子ケットと一枚と手紙が入っていた。

双太「なんだこれ？」

手紙の内容はこうだ。

『どうも！如月 双太さん。おはこんばんにちわ！唐突ですが、貴方様はカリフォルニアのオークションに呼ばれました！もし来るのならばこちらから迎えに来ます。

服装： 制服

開始時間： 夜 11時から

電話番号： 〇〇〇 — □□□ — ◇◇◇

『

双・霧「……カリフォルニア!?」

嘘だろ…!?オークションがカリフォルニアで行われるのか!?

双太「チケットの数は…ちょうど三枚。母さんも行けるぞ…。」

霧慧「何、それ…て言うか!行こうよ!カリフォルニアで行われるオークションに!!」

双太「まあ、まず落ち着け。日付が書かれていない。とりあえず、母さんに聞くぞ。」

母「いいじゃない♪旅行に行きましょう♪」

双太「詳しくはアメリカのカリフォルニアでオークションが行くのが目的だけだな。」

霧慧「そうだ、双太。段ボールの角にこれもあったよ。」

双太「これは…」

渡されたのは携帯。しかも古い方のだ。

双太「……もしかして！」

俺は携帯を上にあげてから下に思いつきり下げた。

双太「やっぱり！携帯型ナイフ!!届いたのか！ありがとう！霧慧!!」

霧慧「へへへ♪」

母「で、いつ行くの？双太。」

双太「今日の夜準備して明日朝呼ぶ。急にできる？準備。」

霧慧「確かに。それでも良いよ、私は。」

双太「母さんは？」

母「そうね。わかったわ。各自準備を！」

双太「決まりだな。」

双太「うーん……」

いるもの……か。とりあえず、携帯型ナイフ、父から貰った拳銃。着替えの服とズボンと下着。

双太「他は……あつ、そうだ。オークシヨンなんだ。とりあえず……1兆は持つか。そう

だ、オークションに出る種類のチエックをな…。」

えーつと…『魔導書 アルマデル』

『怠惰の邪神の大鎌』『ソードナイフ』そして最後に…

霧慧 『伝説の菓子職人が作る最高のドーナツ』？』

双太 「うわっ?!霧慧いつの間に!?!」

霧慧 「ねえ!双太!このドーナツ食べたい!」

双太 「一応全部買い占めるために俺は1兆も持つてくんだよ。」

霧慧 「おお!見栄っ張り!」

双太 「はいはい。じゃあまた明日も早いから寝とけよ。」

「おっと遅いと思えば準備してましたか。」

双太 「っ!誰だ!!」

俺は拳銃を片手に持つて構えた。

「おっと!すみません。私の名前は

きりさき

桐崎と申します。オークションのマネージャーです。貴方様方を迎えに来まして。」

双太 「あの世にか?」

桐崎 「いえいえ。だからオークションと言ったでしょう。連れて参りましょう。カリ

フォルニアに私直々に。」

俺は拳銃をポケットに入れた。

双太「俺はお前を信じるぞ。」

桐崎「どうぞどうぞ。」

双太「……わかった。行こう。ただし、用意をさせてくれ。」

桐崎「ハハ♪わかりました。車で待ってます。」

そう言つて桐崎は下に降りた。

双太「……つておい！ここ二階だろ!?どうやってアイツは……!」

霧慧「とりあえず、準備を済ませよう?」

双太「そ……そうだな。母さん!迎えが来たぞー!」

母「えっ!?早くない!?わかったわ!」

本当に早いわ……

第4話 オークション開始!!

双太「……なあ。」

桐崎「どうしましたか？双太さん。」

双太「…何でこの車は海も渡れるんですかね。」

桐崎「ハハハ♪面白いですね♪双太さんは♪」

母「確かに双太に同意ね。」

霧慧「うん…。」

桐崎「そうですか？普通の車だと思っただけですけど。」

双太「普通じゃねーよ！」

桐崎「そ…：…：…ですか…？？」

現在、俺たちは海の上を桐崎の車でアメリカ、カリフォルニアに向かっている。

まあ、車で海を越えると聞いたら最初は桐崎以外の俺たちはビックリした。

双太「桐崎さん。」

桐崎「どうしました？」

双太「俺の家の二階から降りてましたが足は大丈夫ですか？」

霧慧「そーいやそーうだったね。」

桐崎「正直、未だに少し足首が痛いですね…♪」

母「大丈夫なの!? 桐崎さん？」

桐崎「え、ええ…大丈夫ですよ。ご心配ありがとうございます。」

本当に大丈夫なのだろうか…



桐崎「さて！着きましたよ。アメリカのカリフォルニア。そして『オークションホテル』です!!」

双太『『オークションホテル』!?』

桐崎「はい。泊まる場所も無いのでオークションホテルの予約を取っておきました。」

双太「準備が早いな…」

桐崎「よく言われます。さて…今の時刻が10時29分。開始時間が11時。つまり

双太さんのお母様はホテルの部屋に居ますか？」

母「ええ、よろしくお願いします。」

桐崎「承知しました。霧慧さんはどうします?」

霧慧「双太についてく!」

桐崎「承知しました。ではお母様はホテルの人に双太さんと霧慧さんについてきて下さい。」

各自別れた。そしてオークション会場までの扉まで来た。

金は…よし、全額あるな。

ギー…

会場の扉が開いた。

すると一つの台をぐるりと囲んだ席と大勢の人が居た。

桐崎「双太さんは310番三階の10番目ですね。そして、その隣の311番が霧慧さんの席です。では、良い知らせを待っています。私は双太さんのお母様のボディガードとして部屋に戻ります。」



双太「えーと…310番…ここだな。」

? 「あれ? お前は双太か?」

双太「ん…ああ?! 夢路先輩!」

? 「どうしたの? ユメジ。ソウタ!? どうして君が!」

霧慧「メリー先輩も!」

メリー「霧慧!」

なんと、自分たちの隣の席が一個年上の先輩の

ふじわら ゆめじ

藤原 夢路 先輩とその居候のメリー・ナイトメアもこのオークションに参加していた。

双太「今回どうしたんですか?」

夢路「いやね、今回のオークションのチラシを貰った時メリーが今回の商品に目に映ったらしくて…」

双太「もしかして…その商品って『伝説の職人が作った最高のドーナツ』ですか?」

夢路「ビンゴ! そのまさかだよ。」

双太「メリーはドーナツが好きですもんね。」

メリーの大好物はドーナツなのだ。「メリーが怒ればドーナツを上げよう」と言われる程だ。

夢路「ははは…そうなんだよ。ちなみに双太の目当ては何だ？」

双太「そうですねー…やっぱ『ソードナイフ』ですかね。」

夢路「最近そればかりだよな♪」

双太「あとは先輩と同じくドーナツです。霧慧が欲しいと言ってたので。」

夢路「そうだ。勿論いつもの大金は持ってきたのか…？」

双太「一応一兆は。」

夢路「ナイスだ！ドーナツが多かったら分け合おうか？」

双太「勿論そのつもりです♪」

その言葉の後、「ジー…」っと音がなって中心の台の上に人が乗った。そして、この音と共にオークションが始まるのであった。

第5話 行きは良い良い帰りは怖いオークション

司会「レディー！ース！アーンツツドツ！！ジエントルメーン！！今宵の夜にまたまた始まる！第159回目のオークションを今、現在！開催を宣言する！！」

観客「うおおおー！！！！」

司会「司会は私！第18代目のドレミア・ファミリー・ファン のファンが今回も進めて行くぜ！！さて今回は15つも商品を用意している！！ルールはいつも通り！大きな数の金を宣言した者勝ちだ！！反論はー！？？」

観客「NOー！！！！」

ファン「よしOKー！それじゃ早速やっていくぜー！！第159回目記念すべき一個目はー?!『魔導書 アルマデル』だー！！最初はー…405円からだ!!!」

夢路「双太、あれいるか？」

双太「いらぬですわね。」

メリー「どーなっつう♪」

霧慧「どーなっつう♪」

双・夢「可愛いな…はっ…いー」

双太「先輩もですか…?♪」

夢路「おうよ…♪流石は同士だ…!」

そんな話をしていたら金額を宣言する声が会場に響いた。

老人「100京!!!」

観客「…は?!」

双・夢「…えっ?」

メリ・霧「「えっ…?」

全員「「はあぁー?!」

青年「ちよっ…早いつて…」

ファン「ひやっ…100けっい…だと…」

はっ!ほ、他にいるか…?!この金額を上回る者は…」

観客の皆の顔が固まる。

ファン「えっ、え…つとー…買い取り!!!おめでとうございます!!!」

老人「つつつしやぁー!!!」

青年「金は残ってる?」

老人「はあ?何言つて…むぐう?!」

隣の青年が老人の口を塞いだ。

夢路「何だ…？新種の夢か何かか…？」

夢路は手を眼鏡の様にして両目に当てた。

デイドリーム

双太「いや、新種の白昼夢かもしれないませんよ。」

夢路「てことは！ファンとという奴が夢魔か!？」

双太「いや！もしかしたら、あの老人が…！」

メリ・霧「何言ってるの？ユメジ（双太）。」

双太「何も…！あつ！次の商品が…！」

霧慧「逃げた。」

ファン「さて！気を取り直して！次は『怠惰の邪神の大鎌』だ！さあ！最初の金額は

…820円！」

双太「一応買うか…30万！」

夢路「おつ、動いたね。後輩君。」

双太「まあ…ね♪」

ファン「30万！他はないか!？」

老人「できた…50万！」

双太「食いついた！1億!!」

老人「……3億」

双太「4億！」

老人「5億!!」

双太「6おk……」

ファン「はい決まり!! 5億で老人の勝ち!!」

まさかの結果だった。

老人「しゃっ！」

双太「っ……負けた！」

夢路「だけど惜しかったじゃん♪」

双太「そうですね……♪」

メリー「強いね! ソウタ！」

霧慧「メリーに同意だよ！」

双太「まあな……♪」

夢路「おっと、次は双太が欲しいと言った物だぞ……!」

ファン「さて! 三品目はー!? 『ソードナイフ』!! くー! カッコいいよなあ! ちなみに

俺もこれは欲しい! だが我慢だな! それじゃあ! これは……3万から!」

双太「来た……! 30億!!!」

ファン「勝った！いきなり勝ったぞ!!そして初めて違う選手だ!!さつきからあの老人
ばっかりだもんなぁー!」

双太「っしやー!!!」

三人「「はやつ!?!」」

双太「まあな!……来た。先輩、全額何円持つてきました?」

夢路「えつ…一応90万だがどうした?」

双太「先輩、自分もカッコいいところをさせてください!」

夢路「えつ…」

ファン「さて!そろそろラストだ!4品目は『伝説の菓子職人が作った最高のドーナ
ツ』だ!!最初の金額は…3千から!」

双太「5千億!!!」

ファン「買った!!5千億!?!流石だなあ!」

双太「しやあー!!買いましたよ!先輩!!」

夢路「ナイス!先輩!!」

ファン「スゲエな今回のオークションは!!だがこれも買わなかった者は残念賞として
5万を払ってもらう。そしてラストの商品は!毎回恒例!『鬼ごっこオークション』だ
!!!!今回は日本から来てくれた者がいる!今回はその日本人だ!!!」

四人「えっ…!?」

ファン「日本人たち！逃げろよ…？それではー!!」

老人「チツ…」

青年「始まったか…」

ファン「よーい…スタートオオオオ
!!!!」

第6話 未来を変えにきた予言者

ファン「ハハハハ！逃げていますねえ！さて！お前らルール追加だ！日本人が日本に逃げたら日本の勝ち！もし一人でも捕まえればお前らの勝ちだ！さあ！今後も頑張れよ！！」

現在、俺たちはオークションにいた人達に追われている。

夢路「日本に戻る?！」

メリー「そんな無茶な！」

双太「とりあえず走れ！霧慧大丈夫か!？」

霧慧「う、うん…！まだ大丈夫だよ…」

観客「よっつしやー!!!」

観客の一人が霧慧の後ろまで来ていた。

双太「霧慧!!」

夢・メリー「双太!!!」

老人「音無結界!!」

観客「があっ?!」

観客と俺たちの間に壁みたいなのができる。

双太「……………えっ？」

青年「間に合ったな♪神司。」

神司「あぶねえよ…おい！第3作目の主人公！」

青年「メタイわ！」

青年は神司という人の頭を殴った。

神司「いつてー！何しやがる！亜無！」

双太「お前らは…いつたい…」

神司「おい、話してやれ。亜無。」

亜無「わーったよ。俺たちはこの世界の未来を変えに来た。今は電車だつて動いてるし、コンビニ行けば店員が「いらっしやいませー」つて言ってくるだろ？」

神司「キモいな…シシシ♪」

亜無「うるせえ！まあ、これがお前の日常だ。…と云つてもお前らはもう、日常茶飯事を越えて日常茶飯事じゃなくなってるがな。でだ。俺たちは世界の未来を変えると言つたな。俺たちがこのオークションに来なかつたらお前らはあの観客に捕まって奴隷として売られてた。」

メリー「そのときは私たちは抵抗できるでしょ？」

メリーが亜無という人の話に対して質問した。

神司「あー、確かにお嬢ちゃん言う通りだ。だが、相手はお嬢ちゃんが思うような敵じゃねえ。未来では、お嬢ちゃん達が抵抗して気絶させられ、気づけばあんなことやこんなことそんなことまでされていたな。」

メリー「ええ…」

亜無「まあ、ここは俺たちが止めるから皆は逃げとけよ。」

神司「双太…だっけな？お前がここに来たときの車が奥の海に桐崎を手配してある。」

双太「桐崎さん!?まさか…」

神司「その話は桐崎に聞け。ああ、そうそう。これをお前に渡すわ。」

神司が小さな鎌のキーホルダーを俺に投げた。

双太「わわっ！キーホルダー?」

神司「まあ…そうだな。それじゃあ結界解くから解いた瞬間一斉に走れよ…!」

双太「わかりました…。」

すると結界が消えて解けた。

亜無「行け!!」

俺たちは一斉に海の方に走った。

亜無「さて…♪大事故でも起こすか♪」

神司「亜無。行かなくて良かったのか？」

亜無「アイツ一人と他の奴等ならこの先の未来も何とかなるだろう。俺は、
双太

アイツを信じる。しかも♪お前がああ物の上げたなら運命に勝つだろう？」

亜無と神司は戦いながら話した。

神司「まあ…久しぶりの予知だったから未来を変えられるかは分からんけどな。」

亜無「そこは諦めるなよ…。」

神司「どうだ？どっちが多く倒した？」

亜無「380」

神司「勝ったな♪381」

亜無「一回多いからって調子乗るな！」

観客「くっ…テメエ…ら…!!」

亜無「ほいっと。」

観客「ぐがあっ?!」

亜無「はい。これで同点。残りは…」

神司「ああ、ドレミア・ファミリー・ファン。一人だろう。」

◆
霧慧「桐崎さーん！」

桐崎「うん？ おお！ 霧慧さん！」

双太「日本まで乗せてくれ。」

桐崎「わかりました。そちらの方たちは？」

双太「俺の学校の先輩たち。」

夢路「俺は、藤原 夢路。ヨロシク！」

メリー「メリー・ナイトメアよ。」

桐崎「夢路さんとメリーさんですか。では日本に戻りましょう。」
そして俺たちは桐崎の車に乗って日本に戻った。

メリー「もう朝…」

霧慧 「キレイな朝焼け♪」

まあ、着いたころにはもう、朝だっながな。

第7話 俺らの文化祭 . 1

『朝だぞッ！起きるんだッ！朝だぞッ』

起きるんだッ！』

双太「んん…朝か…」

朝7時半、夢路先輩から貰った『FB グリツチヨ』の目覚まし時計が鳴っていた。俺はアラームを止めた。そしてあることに気づく。

双太「…げっ…！制服のまま寝てしまったのかよ…」

そう、あのオークションから帰ってから一回も着替えず寝てしまったばい。

双太「はあく…着替えしたかったな…」

とりあえず下に降りてみた。

母「あら、おはよう♪双太♪」

桐崎「おはようございます。双太さん。」

双太「おはよう…って!?何で桐崎さんが俺の家にいるんだよ!?!」

母「あら？あのあと寝ちやったのよ？貴方たちは。だからお母さんと桐崎さんと一緒に家に運んでもらったのよ。先輩たちは起きて歩いて帰ったけどね。」

双太「マジか…」

霧慧「おはようございまーす…って桐崎さん!？」

桐崎「おはようございます。霧慧さん。」

母「双太。霧慧ちゃんに説明してあげて。」

双太「実は…」

俺は霧慧にさつき話された事をそのまま話した。

霧慧「へー…ありがとうございます！桐崎さん！」

桐崎「いえいえ、別に良いですよ。」

母「そーいや二人共。今日から文化祭りやないの？」

双太「そうだった！母さん！食材ある!？」

母「当たり前よ！冷蔵庫に買ってあげた食材があるわよ！」

双太「ありがとうございます！母さん!!霧慧！」

・
・
・

あの服を準備しとけよ？」

いさな

霧慧「大丈夫だよ！勇魚先輩が持ってきてくれるつて！」

双太「了解だぜ！桐崎さん。頼みがあるのですけど…」

桐崎「??」

双太「ありがとうございます。」

桐崎「いえいえ、乗せてくださいなんて全然良いですよ。はいどうぞ。」

双太「ありがとうございます。」

桐崎「いえいえ、頑張ってくださいね！双太さん！霧慧さん！」

双・霧「ハイッ！」



双太「お待たせしました…！」

メリー「遅いよ！ソウタ！リエ!!」

・
・

双太「ごめんごめん！勇魚先輩。あの

服の準備OKですか？」

勇魚「勿論！じやーん！霧慧ちゃん専用のメイド服だよ！お父さんが徹夜で作ってくれたよ！」

霧慧「わー！かわいい!!」

夢路「うむ、これで三人のメイドができた訳か。」

貴照「文化祭 再度集まるメイドたち」く 秋柳 貴照 く」

双太「そういや、今回特別な助っ人がいると聞いたのですが…」

夢路「ああ、そうだ！料理人が一人じゃ、客がいつばい来たとき対処しきれないだろう？だから！今回のゲストは!!」

？「おつ、俺の出番か。」

ドアの奥から人が入ってきた。その人が：

夢路「喫茶店STOのマスターにし、勇魚のお父さんの「橘（たちばな）のおやつさん」だツ!!」

橘「久しぶりだな。双太くん。」

双太「マジすか…は、はい！お久しぶりです！「マスター」！」

貴照「そうそう。メイドが三者だけじゃ、物足りないだろう？だから霧島さんと呼ん

でみた。」

咲「やつほー！調子はどうかなー？」

勇魚「咲ちゃん!？」

霧・双「咲先輩!？」

夢路「咲はメイド服用意してあるのか？」

咲「無いっ！」

夢路「無いのかよっ！」

メリー「夢路ナイスツツコミ!!」

双太「それなら咲先輩。料理を真似することはできます？」

咲「勿論！」

双太「なら、決まりですね。」

メリー「そういや、ユメジとタカは何するの？」

夢路「そりや…なあ？」

タカ「そう…だね。夢の字。」

メリー「まだ前のこと引きずっているんだ…」

前のこととは、前文化祭のときの夢路先輩と貴照先輩のバンドだ。うまくいった。だが、その服装がいけなかったのだ。なぜ夢路先輩は普通のバンドみたいな服装ではなく

女装にしたのか。この事から一週間は「レディースバンド」というそんなまんなの異名が付いた。

夢路「ありやしようがないだろ…」

双太「何で女装したんですか？」

夢路「そりゃあ、タカの意見だからだよ…」

タカ「ありがとう。」

夢路「当たり前だろ。親友。」

霧慧「あれ？誰かを忘れてるような…」

？「ちよつとー!!」

誰かが思いっきりここに向かって走って来た。

霧慧「そうだ！由衣先輩だ!!」

？「あれー？まさか呼ぶの忘れたとか言わないよねー？」

夢路「っ！すみません！堀江さん…」

菜桜「たつく…」

双太「まあ、由衣先輩と菜桜先輩は文化祭の仕事何をするんですか？」

菜桜「私たち二人は吹奏楽の発表さ♪」

双太「わかりました。」

てことは…今居る皆の役割は…

如月 双太 … 出張STOの店員

傘見 霧慧 … 出張STOのメイド

藤原 夢路 … バンドのメンバー

橘 勇魚 … 出張STOのメイド

メリー・ナイトメア … 出張STOのメイド

秋柳 貴照 … バンドのメンバー

霧島 咲 … 出張STOの店員 (緊急参加)

光風 由衣 … 吹奏楽のメンバー

堀江 菜桜 … 吹奏楽のメンバー

橘のおやつさん … 出張STOの店長

…こんな感じだな。

夢路 「さて！今回の文化祭を成功させよーぜ！！」

一同 「オー!!!」

『えー皆さん。各自準備はよろしいでしょうか？それでは！これより六花高等学校の文化祭の開催をここに宣言します!!では！仕事がある生徒・助っ人さんたちは頑張つて下さい！仕事がない生徒は思いっきり遊び尽くしましょう！』

とアナウンスが校内に流れて文化祭が始まった。

第8話 俺らの文化祭 . 2

メリー「みんな！カルボトウー！ペペロンワン！」

霧慧「こっちは黒オリーブスパワン！食後にマンゴーアイス！」

勇魚「食後のアイスコーヒートウー！」

店員「了解!!」

現在、文化祭の「出張STO」の店員のとうより料理人として働いている。どうやら、今の時刻は12半。つまり客はいっぱい来るといふ訳だ。

橘「はいよ。アイスコーヒー2個だ。」

勇魚「はいい！」

双太「得意のペペロンワン！アーンドツ…！カルボトウーだ！」

メリー「了解！」

咲「黒オリーブワンだよ！食後のマンゴーアイスは今から！」

霧慧「わかったよ！」

◆
く休憩中く

双太「お疲れー！」

メリー「流石に今回は疲れたよ…」

勇魚「確かにメリーの言う通りだよ。」

橘「ほらよ、ホットミルクだ。」

咲「ありがとね！」

霧慧「そういや今回何人の客が来てくれたの？」

双太「えーつと…」

俺が答えるより咲の答えが早かった。

咲「83人だね。」

霧慧「そんなに!?!」

双太「そりゃ、疲れるわ…」

? 「あれ！休憩中か…」

? 「後で来るか?」

? 「いや!今行くぞ!」

? 「おい!待て空上!」

双太 「ん…この声は…!」

チリンチリーン

空上 「よっ!如月!」

岸縞 「ごめんな双太。休憩中にさ。」

双太 「休憩中だ。」

空上 「冷たいねー」

双太 「うるせえやい。」

橘 「何だ?双太の友達か?」

空上 「はい!空上 一郎です!」

岸縞 「岸縞 信です。」

橘 「まあ、とりあえず座れ。客は客だ。」

双太 「そうですね。それじゃあ、メイドたちよろしくね。」

メリー 「じゃあ、私が接客するね♪それでは、ご注文はどうします?」

岸縞 「うーん…昼飯はいいから…ブルーベリーアイスで。」

空上「俺はスイートポテト。」

メリー「わかったよ。ブルーベリーワン！スイートワンね！」

店員「了解！」

咲「そうだ！橘さん。デザート持つてくの双太にしようよ。」

双太「えっ!？」

橘「それも良い案だな。それならよろしくだ、双太。」

双太「マジすか…ってまあいいけど。」

橘「決まりだな。…よし、完成だ。頼むぜ双太。」

双太「了解ですよ。マスター。」

俺が注文されたデザートが乗っているお盆を持つとうとしたとき…

霧慧「それだったらコレ着なよっ♪」

双太「わぷっ?!」

霧慧が俺に何かを無理やり着させた。

双太「な、なんだあ？」

咲「はははは！それでいいよ！」

橘「霧慧ちゃんさすがだなあ！」

自分の着ている服を見たら

双太「め…メイド服…」

なんと俺が今着ている服はメイド服だった。

霧慧「頑張ってね…！（キリッ）」

双太「普通はかつこまで言わねえだろ…」

橘「頑張れ…！」

双太「は…行つてきます…。」



双太「お待たせしました。ブルーベリーアイス一つとスイートポテト一つです。」

空上「キヤハハハ！メイド姿って…！メイド姿って…！」

双太「うるせえよ！」

岸縞「ごめん…ふっ…双太…」

双太「岸縞まで!？」

空上「でもよ…咲夜さんみてえだぞ。良かったじゃねえか。」

空上は「グツ」つと親指を上にした。

双太「うるせえよ……とりあえず食べるよ。」

空上「いただきます！」

岸縞「いただくわ。」

双太「そーいや、嘘無 純の件はどうなってる？」

二人は首を横に振る。

双太「何も掴めていないと。」

空上「その件のことは俺らも手がかり一切無しだ。」

岸縞「確か警察とか先生からだとか家出と聞いてるがな。」

双・空「あのバカ真面目の嘘無が家出な訳あるかよ！」

岸縞「だよな……」

三人「うーん……」

夢路「何難しい顔してんだよ。」

双太「センパイ。」

いつの間にか夢路先輩とタカ先輩が帰っていた。タカ先輩はあっちの机で注文を頼んでいた。

岸縞「いえ、考え事です。」

夢路「そうか。んじゃ、気分転換に面白いおまじないしてやろうか？」

空上「おまじない？」

岸縞「何のおまじないですか？」

夢路「今日の夜どんな夢を見れるかのおまじない。つて言うか占いだな。やってみるか？」

空上「別にいいですね。」

岸縞「そうですね。」

夢路「それじゃあ見るぜ。」

夢路先輩は片手の指をオツケーサインの形にして目に当てた。

夢路「一郎は…楽しい夢を見れそうだな。」

空上「しゃっ！」

夢路「信は…っ！」

岸縞「えっ!? どうしました?！」

夢路「いや、ちよつと待つてろ。」

夢路先輩は岸縞の肩に手を乗せた。その動きにメリー先輩は察したらしく夢路先輩の近くまで駆け寄った。

双太（まさか…！白昼夢か…！なら…）

俺は小声で

双太「コール。「庭」を開いてくれ。」

『無理だな。』

コール：少し前に気づいた夢魔の一人。急用で俺の体を借りたいと言っていたから体を貸している。

双太「何でだよ!？」

コール『双太。お前の友達がピンチなのは判る。だが俺は夢魔を殺すことしかできない。知ってるとは思うが「器」を持った夢魔を殺してしまったらその器も死んでしまう。というよりは器の方は生命自体死ぬのではなく夢魔は人間の「夢」に住む。つまり夢魔を殺してしまうと「夢を無くしたただ歩くだけの人形」になってしまう。』

双太「だ、だけど…」

コール『ほら、こんな話をしていたら先輩らが帰ってきたぞ。』

コールのそういつたので先輩の方を見たら先輩は疲れた感じになっていた。

第9話 悲報が起きたらブツ飛ばせ!

双太「…妬ましくわないさ。」

コールのやつ…

霧慧「どうしたの?何か元気ないよ?双太。」

双太「…ん?大丈夫だよ。ありがとね♪」

そんな大事なことで無いらな。

現在文化祭も終わって桐崎さんの車で下校中だ。あの後時間を見たら夕方の6時半だった。そして下校時間だった。

双太「はあく…前から聞いてたけど本当にこの高校の文化祭は一日しかないなあ…」

霧慧「まあ、良いじゃない。」

桐崎「…はい。はい。わかりました。双太さん良い情報と悪い情報がありますがどつちを先聞きますか?」

双太「勿論良い情報から!」

桐崎「わかりました。では良い方を言いますね。良い情報と言うのは前のオークションの事は覚えてますか?」

双太「あのオークションか…」

ファンの時のオークションの事か…確かドーナツとソードナイフを買って…

双太「あつ、ポケットに…これだこれだ。」

俺はポケットから小さな鎌のキーホルダーを取り出す。

霧慧「何それ？」

双太「俺らを助けてくれた神司って人から貰ったキーホルダーさ。」

霧慧「ふーん…」

双太「で、そのオークションでどうしたのですか？」

桐崎「オークションに買った物が届きました。」

双太「来たか…」

霧慧「悪い情報の方は？」

桐崎「…その助けてもらった神司さんと亜無さんがファンに敗れたそうです。」

双太「マジか…!」

桐崎「信じられないと思います。最初聞いたときは私も驚きました。ですが、これは

現実…真実なのです。」

双太「まずは、どう借りを返すかだな。」

桐崎「そうですね。ですが今優先なのは家に帰ること。」

双太「俺らを捕まえようとしたフアンのことだ。何か企みを入れて送ってきたに違いない。」



双太「たっだいまー。」

霧慧「たっだいまー!」

桐崎「たっだいまです。」

母の返事が返ってこない。

双太「お母さん?」

母「……ああ、テメエか……」

双太「っ!?!」

何時もの母ではない。

母? 「へえー、お前が双太って言うのか……ちようど良いな♪桐崎とお前さんの彼女もいるのか。」

霧慧「だつ誰……！」

母？「あれ？分かると思うのだけどな……俺だよ。ドレミア・ファミリー・ファン。あのオークションの司会者だ。」

双太「ファン……！」

霧慧「嘘でしょ……？」

桐崎「いつの間に……！」

ファン「一応、俺は夢魔だ。どうやっただってあの二人を倒したとしても仲間に倒してもらったとしても俺はお前ら人間の夢の中で行き来できるんだよ。」

双太「出ていけよ……！」

ファン「聞こえねえな。」

双太「俺の母から出ていけ!!」

すると俺と母に憑いてるファンがコールの「庭」に飛んだ。

ファン「ありやありや……！」

コール「めんどくせえよ!!ドレミア・ファミリー・ファン!!テメエは何時からああなつたんだ!?!バカがつくほどのマジメだったのに人間を器にだあ!?!ふざけるのもいい加減にしやがれ!!」

ファン「うるさいなあ……！コール・クルーガー。そうだ♪喧嘩を売るみたいなこと言

うがな…♪」

コール「何だ…?」

ファン「人質だな。いや、夢魔質…? まあ、それは置いといて。お前の兄貴のサタヴァンが俺の後輩何だよ♪」

コール「知ってるよ。」

ファン「その兄貴を夢魔質にしている…♪」

コール「テメエ…!!」

ファン「待て待て♪ 双太にも情報を持ってきて上げてるんだよ♪」

双太「…?」

ファン「嘘無 純。覚えてるか?」

双太「っ! 何か知ってるのか…?」

ファン「ああ、そうだった。今は「紅風 亜無」だったな♪」

双太「紅風…亜無…。まさか…!」

ファン「しかもサタヴァンは紅風 亜無の体に夢魔として憑いてるんだってよ♪」

双太「つまり…!」

ファン「そのままかさ♪」

コール「兄貴が憑いてる体…紅風 亜無…いや、嘘無 純はお前の人質になると

…双太…」

双太「コール。思っていることは同じだ。」

双・コー「ドレミア・ファミリー・ファンをブツ飛ばす…!!」

ファン「ケケケツ…♪俺一人じゃ無理なんだよなあ…社長行けるか…?」

『何だ、ファンか。私は行けんが【闇人】に行かせるわ。それまで待っててね。』

ファン「了解。」